

ベトナム小学校5年生の男女格差とEFA 2001年のベトナム調査の結果より

齋藤みを子
(ユネスコ教育計画国際研究所)

1. 序論

多くの国にとって教育の男女平等性は重要関心事である。ダカールの最終フレームワークの第5目標にも見られるように、2015年までに「万人のための教育(Education for All: EFA)」を達成させるためには、2005年までに、初等・中等教育での男女間格差を解消し、とくに女子が基礎教育に平等にアクセスでき良質の教育が得られることに焦点をあて、2015年までに、教育における男女の平等を達成させるよう、世界的な積極的な取り組みが必要だと認識された(UNESCO 2000)。また「ミレニアム開発目標(Millennium Development Goals: MDGs)」にも男女の平等を促進させ、女性に権限を与えるという目標が含まれている(United Nations 2006)。

ユネスコのEFA Global Monitoring Report 2003・2004によると「男女平等性」とは男女が学校参加、教授法、カリキュラム、進学方針、学力、学校後の人生の機会において同様のメリットとデメリットを受けることであると定義されている(UNESCO 2003)。

ベトナムは1945年の独立より、数々の教育改革を経験してきた。1975年の合併の際の改革にてマス教育は取り入れられたものの、もっとも重要な改革は1980年代後半のドイモイ思想(刷新的思想)で、抑制経済から市場経済への転換にかかわるものである(Le 2006)。教育はベトナムの経済発展のための要因であると考えられ、教育が優先事項

となった(World Bank 2004)。1990年には量的拡大が行われ、初等教育の純就学率は90パーセントを超えた。1990年代後期には、約15,000の小学校に1,000万人以上の小学生が就学した。初等教育入学者全体の68パーセントが初等教育最高学年に到達し、そのうち98パーセントが中等教育へ進学するようになった。しかしこの拡大はすべての地域や集団に見られるものではなかった。Le (2006)によると、教育へのアクセスは所得、人種、男女による格差があった。

本小論の目的は、ベトナム各地域での学校への参加、学校でのプロセス、家族環境、及び学力において、男女平等性が達成されたかどうかを分析することである。特に、次にあげる研究課題について答えようとするものである。

就学状況

- ・小学校5年生の女子の比率は小学校5年生全体の何パーセントか。
- ・小学校5年生の男子と女子では欠席日数にどれほど格差があるか。
- ・小学校5年生の男子と女子では年齢が超過した生徒の割合にどれほど格差があるか。

学校でのプロセス

- ・小学校5年生の男子と女子の留年経験率にどれほど格差があるか。
- ・小学校5年生の男子と女子の第5学年を留年した割合にどれほど格差があるか。
- ・小学校5年生の男子と女子が所持する教科書の数にどれほど格差があるか。
- ・小学校5年生の男子と女子が所持する教材

の数にどれほど格差があるか。

家庭環境

- ・ 小学校5年生の社会経済レベルの男女格差はどの程度か。
- ・ 小学校5年生の通学時間の男女格差はどの程度か。
- ・ 小学校5年生が家事手伝いに費やす時間の男女格差はどの程度か。
- ・ 小学校5年生の男女に対し家族の教育に対する関心の格差はどの程度か。
- ・ 小学校5年生の塾にかよったり家庭教師をつけたりする割合の男女格差はどの程度か。

学習達成度

- ・ 小学校5年生の読解力の学習到達度の男女格差はどの程度か。
- ・ 小学校5年生の算数の学習到達度の男女格差はどの程度か。

小学校高学年は教育政策作成者の関心事であり、ベトナムの調査では小学校最終学年の5年生が対象であった。小学校のほかの学年の指標は含まれていない。さらに、EFAの文脈ではその後の人生での機会も男女平等性における重要課題と謳っているが、本小論には含まれていない。

この調査の結果を理解するために、これらの指標を同時に表示した。しかし、これらの指標は、教育の条件と学習達成度に因果関係を持たせるものではない。男女格差は、ここに報告されていない数々の指標に因る可能性もある。

2. 方法論

(1) データ資料

この研究のデータは、2001年にベトナムのすべての省(当時61省)の小学校5年生から集められた。この調査はベトナム教育省、世界銀行、ユネスコ教育計画国際研究所の協力プロジェクトで、世界銀行(World

Bank)のIndependent Evaluation Report(2006)によると、学校へのアクセスではなく学習達成度に焦点をあてた、世界銀行では非常に珍しいプロジェクトであった。

データアーカイブ(World Bank 2001)にはベトナムの3,636校に在籍する72,660人の小学校5年生に関するデータが収容されている。データアーカイブは学校長、教師、生徒用の調査書から集められた情報、および、生徒と教師用の算数と読解力の試験の回答が含まれている。これらのあらゆる情報源からのデータが、すべて生徒のレベルで収められた。学校参加、学校でのプロセス、家庭環境は生徒用調査書に掲載された質問で、学習到達度は読解力テストと算数のテストの点数で測定された(点数の測定方法は下記(3)を参照)。

(2) 調査対象母集団および標本

調査対象となる母集団は、「2001年度公に認可されたベトナムの全61省の特殊学校以外の小学校に通う1,808,089人の小学校5年生」と定められた。小学校5年生の人数が20人に満たない小学校に通う生徒は対象外とされ、その比率は母集団全体のわずか0.22パーセントであった。

標本は二段階で選択された。まず第一段階では、小学校5年生の就学数による確立比例抽出法を用いて、調査対象校を層別に抽出した。標本抽出は、テストの得点が省内での学校差30パーセント、個人差70パーセントと仮定し、95パーセントの信頼水準において、平均値の標準偏差に対しては ± 0.1 以内、パーセンテージに対して ± 5 パーセント以内の標本誤差になるよう、つまりは各省で400人の生徒の単純無作為抽出と同等の正確さを有するように当初はデザインされた。しかしこのパラメーターでは、各校で20人の生徒を抽出する場合、各省134校(国全体で8,178校)が必要となり、データ収集の予算を大幅に上回ることになるので、平均値の標準偏差

に対しては ± 0.15 以内、パーセンテージに対して ± 7.5 パーセント以内の標本誤差になるよう、つまり各省で178人の生徒の単純無作為抽出と同様の正確さを有するパラメーターを駆使することになった。その結果、各省60校(国全体で3,660校)が小学校5年生の就学数よっての確立比例抽出法で選ばれた。

第二段階では、抽出された学校の第5学年に在籍するすべての生徒の中から20人の生徒が無作為抽出され、この結果、標本必要数は73,200人となった。実施数は3,636校からの72,660人であり、回収率は99パーセントであった。さらに、各校2人の教師が無作為抽出され、標本の中には合計7,260人の教師が含まれた。データ収集後、標本の正確さを各省ごと検証した結果、学校差が30パーセント以上の省では、目標の178人の生徒の単純無作為抽出と同様の正確さに満たなかった。しかし、国全体では、5,900人の生徒の単純無作為抽出と同様の正確さ(極小の標本誤差)を得ることができた(Ross et al. 2004)。省の集まりである地域ごとでも、標本誤差は非常に小さいものであった。

標本を採った時点での母集団とデータ回収された時点での母集団の相違、省の不均衡、そして省内での目標標本数と実際標本数の相違を調整するために、標本加重操作がされた。

標本選出の手順についての詳細は、第3巻第4章に報告されている(Ross et al. 2004)。

(3) 読解力と算数のテスト

テストの構成を決定するために、まず、ベトナムの小学校5年生の読解力と算数の公認のカリキュラムと教科書が検証された。ベトナムは2000年にはカリキュラム改定の最中であり、テストの枠組みには改正前および改正後のカリキュラムが両方含まれた。

読解力のテストには、三つの側面(物語的文章、解説書的文章、記録書的文章)が含ま

れた。それぞれの文章の後に、その文章に関する一連の質問が続き、答えを選択肢の中から選ぶ形式のテストであった。読解力の問題は合計60問で、教師用のテスト45問との間に、10問の共通問題で連携が作られた。教師用のテストはその他、IEAの読解力調査の母集団B(14歳)との間にも、8問の共通問題があった。

算数のテストには、三つの側面(数、測定、グラフ・データ)が含まれた。算数のテストも読解力のテスト同様、答えを選択肢の中から選ぶ形式であった。算数の問題60問のうち、7問は教師用のテスト(合計45問)にも使われた。算数のテストは国際調査との接点はなかったが、10問はIEAのTIMSSをモデルにした類似問題であった(Griffin 2004b)。

ラッシュ測定モデルを使い、生徒用と教師用のテストを科目ごとに同一の線上に並べて比べた。すべての問題をカリブレートした際のテストの信頼性は読解力テストでは0.92、算数のテストでは0.91であった。ラッシュ測定モデルで得られたパラメーターを使って読解力と算数のテストが採点された。生徒の能力測定値は、それぞれの科目で平均点500点、偏差値100点となるよう標準化された。

テスト問題作成の作業の詳細は第3巻の第2章と第3章に報告されている。

3 . 結果

標本抽出では各省を「層」としたが、結果報告は地域別にする。これらの結果をより理解するために、表1に背景的情報を地域ごと示した。

北西部が一番貧しい地域であり、それに続き、北東部、中部高原、北中部と続いた。このパターンは少数民族の率、ベトナム語を全く話さない率、公共施設への平均距離にもみられた。

表1 地域の背景的情報

地域	貧困率* (1998)	少数民族の 率	ベトナム語 を全く話さ ない率	市街地率(学 校長の見解)	学校の平均 年齢	公共施設平 均距離(km)
紅河三角地帯	29	1(0.2)	0(0.1)	17(1.4)	30(0.8)	2(0.1)
北東部	62	34(1.0)	8(0.5)	16(1.4)	29(0.8)	5(0.2)
北西部	73	78(2.5)	22(2.2)	15(2.7)	32(1.3)	9(0.7)
北中部	48	11(1.8)	3(0.7)	15(2.1)	28(1.1)	5(0.2)
中央海岸	35	5(1.1)	2(0.6)	25(2.9)	16(0.5)	4(0.2)
中央高原	52	26(2.6)	8(1.2)	27(4.2)	14(0.8)	5(0.4)
南東部	12	8(1.0)	2(0.3)	42(2.2)	22(0.9)	4(0.2)
メコン河三角地帯	37	6(0.5)	1(0.2)	17(1.7)	21(0.5)	4(0.2)
ベトナム	58	13(0.4)	3(0.2)	21(0.7)	25(0.3)	4(0.1)

(注) 可能な限り標準偏差を () に表示した。

(出所) Reform or Renovations? (Le 2006), Data Archive: Vietnam Grade 5 Mathematics and Reading assessment study (World Bank 2001) より筆者作成

(1) 学校就学の男女格差

1990年のジョムティエン会議以来、小学校へのアクセスにおける男女格差の減少に著しい進歩が見られる。ユネスコのEFA Global Monitoring Report 2003・2004年にも述べられるとおり、世界的に女子の男子に対する就学数割合は1990年の0.88から2000年の0.94に向上した。ベトナムでは、この期間その割合は0.93から0.94に動いた(UNESCO 2003)。

一方、UNESCO (2003) は学校に籍を置くことと学校に行くことを区別している。就学数のジェンダーパリティ(GPI)は出席数のそれよりも高いと述べられている。女子は一旦入学すると、男子に比べ、学校に残る傾向にあると義論している。これは小学校全体での話であるが、本詳論では小学校5年生の生徒のみを扱う。学校参加については：(a) データ収集時における小学校5年生全体に対する女子生徒の割合、(b) データ収集前ヶ月間に欠席した日数の平均、そして(c) 年齢超過した小学校5年生の割合、の三つの指標で検証した。

(a) 小学校5年生女子の割合

調査に参加したすべての5年生の生徒の性別が記録された。ベトナムのそれぞれの地域での小学校5年生女子の割合と標本誤差が図1に示されている。母集団での女子の比率は、信頼度95パーセントで長方形の先端にある線によって示された範囲内にある(報告された比率±標本誤差の2倍)といえる。例えばベトナム全体では、信頼度95パーセントで、小学校5年生の女子の比率は、47.55パーセントと48.60パーセントの間(つまり $48.1 \pm 2 \times 0.26$)に分布するといえる。

図1より、すべての地域で女子の割合は50パーセントに達しなかった。標本誤差を考慮すると、紅河三角地帯と中央海岸以外のすべての地域で信頼度範囲の上限が50パーセントを下回っていた。つまり信頼度95%で、小学校5年生のレベルでは男子の数のほうが女子の数より多いということになる。貧困と隔離の度合いを考慮すると、女子の比率は北西部に続き中部高原が低いことは予想された。しかし第二の貧困地域北東部は、メコン河三角地帯などの、より開発された地域と同程度

の女子の比率であった。

本小論には提示されていないが、学校長が報告する小学校5年生の女子生徒の比率及び学校全体の女子生徒の比率も同じパターンを示した。さらに、これらの結果は、Le (2006)が報告する初等教育全般での男女格差とも類似するものである。

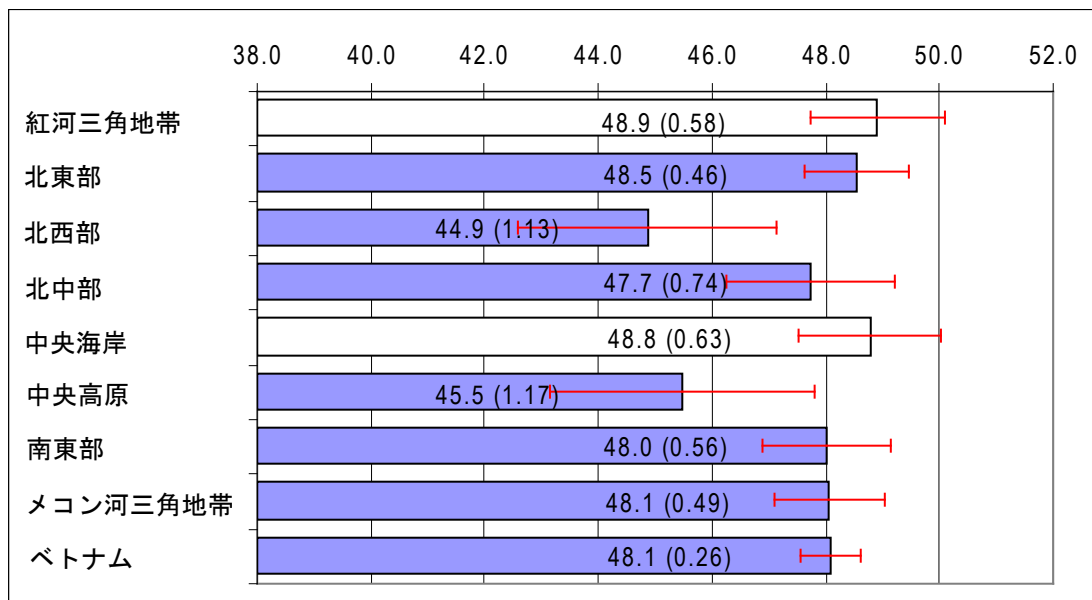
(b) 小学校5年生の欠席日数

ベトナムの小学校5年生の調査では、各生徒にデータ収集の前の月に何日間欠席したかを尋ねた。表2は月間の欠席数の平均値と標本誤差、その男女格差、及びその格差の標本誤差を示したものである。男女格差の欄は、女子のほうが男子よりも欠席数が多い場合はプラスに、少ない場合はマイナスになっている。男女格差の標本誤差は男女それぞれの平均の分散から合計の平方根を計算したものである。一般的に、ベトナムの男子も女子もあ

まり欠席はしなかった。最高値は中央高原の1日であった。しかし、就学数とは対照的にすべての地域で欠席数は女子よりも男子のほうが多かった。男女格差が95パーセントの信頼度で統計的に有意となるためには、格差が標本誤差の2倍もしくはそれ以上でなければならない。標本誤差の大きさを考慮すると、紅河三角地帯、北西部、北中部、中央海岸、南東部、そしてベトナム全体では、男子のほうが女子より欠席数が多かったといえる。これらの結果は女子の就学率は男子より低い欠席数も少ないというUNESCO (2003)の結果と一致していた。

(c) 小学校5年生の年齢の超過した生徒の割合

UNESCO (2003) は就学率という指標には年齢の考慮は不可欠であると指摘しており、年齢の超過した生徒の割合という指標は



(注) 右端の短い横線は信頼度95%の標本誤差の範囲を現す。濃く塗られた長方形は男女格差が信頼度95%で有意であることを示す。

(出所) Data Archive: Vietnam Grade 5 Mathematics and Reading assessment study (World Bank 2001) より筆者作成

図1 2001年ベトナムの小学校5年生の女子の比率

重大な情報のひとつであるといえる。

ベトナムの調査では、小学校5年生の生徒それぞれに誕生日を尋ねた。ベトナムの児童は、6歳になると小学校に入学する、つまり、1年生の学年度の間に6歳になるわけである。もし、入学が遅れたり留年をせず、ごく

普通に教育システムを進学すれば、5年生の生徒は、2001年4月のデータ収集時には124ヶ月から136ヶ月の年齢のはずである(World Bank 2004)。つまり136ヶ月よりも年齢の高い生徒が、小学校5年生では「年齢を超過した生徒」と考えられる。表3には、

表2 2001年ベトナム小学校5年生の男子と女子の前月の欠席数の平均値(M)と標本誤差(SE)

地域	一ヶ月の欠席数						
	男子		女子		男女格差		
	M_B	SE_B	M_G	SE_G	$M_G - M_B$	$SE_{M_G - M_B}$	
紅河三角地帯	0.5	0.02	0.4	0.02	-0.1	0.03	**
北東部	0.6	0.03	0.5	0.02	-0.1	0.03	**
北西部	0.9	0.08	0.7	0.07	-0.2	0.10	
北中部	0.8	0.05	0.6	0.04	-0.2	0.07	**
中央海岸	0.7	0.05	0.6	0.03	-0.1	0.06	**
中央高原	1.0	0.07	0.8	0.07	-0.1	0.09	
南東部	0.6	0.03	0.5	0.02	-0.1	0.04	**
メコン河三角地帯	0.8	0.03	0.7	0.02	-0.1	0.04	
ベトナム	0.7	0.01	0.6	0.01	-0.1	0.02	**

(注) ** 男女格差は信頼度95%で有意。

(出所) Data Archive: Vietnam Grade 5 Mathematics and Reading assessment study (World Bank 2001)より筆者作成

表3 2001年ベトナム小学校5年生の男子と女子の年齢を超過した生徒の割合(P)と標本誤差(SE)

地域	小学校5年生の年齢超過の割合						
	男子		女子		男女格差		
	P_B	SE_B	P_G	SE_G	$P_G - P_B$	$SE_{P_G - P_B}$	
紅河三角地帯	7.9	0.45	5.3	0.35	-2.6	0.57	**
北東部	29.5	0.82	22.9	0.81	-6.6	1.15	**
北西部	53.6	2.44	45.6	2.33	-8.0	3.37	**
北中部	24.4	1.30	20.4	1.28	-4.1	1.82	**
中央海岸	20.9	1.12	17.0	1.13	-3.9	1.59	**
中央高原	43.8	2.01	36.4	2.30	-7.4	3.06	**
南東部	27.6	0.94	22.3	0.83	-5.3	1.25	**
メコン河三角地帯	41.6	0.92	36.6	0.96	-5.0	1.33	**
ベトナム	27.2	0.36	22.2	0.39	-5.0	0.53	**

(注) ** 男女格差は信頼度95%で有意。

(出所) Data Archive: Vietnam Grade 5 Mathematics and Reading assessment study (World Bank 2001)より筆者作成

小学校5年生の男子と女子の年齢を超過した生徒の割合が示されている。

年齢を超過した小学校5年生の生徒の割合は、紅河三角地帯の女子の5.3パーセントから北西部の男子の53.6パーセントまで幅があった。男女格差については、すべての地域で統計的に有意に5年生の男子のほうが女子より年齢を超過した生徒の割合が多かった。これらの格差は紅河三角地帯の2.6 percentポイントから北西部の8.0 percentポイントまで幅があった。

もし女子のほうが恵まれない状態にあるならば、彼女らのほうが年齢を超過した生徒の割合が多いはずである。しかし実際のところ、その逆であった。女子は男子に比べると、より恵まれた状態にあった。小学校5年生の時点で男子のほうが年齢が高い理由として、男子は女子より遅く入学したが、女子より多く留年したかの二つの仮説が考えられる。

(2) 学校でのプロセスにおける男女格差

EFAゴールの達成のためには、学校参加においてだけの男女平等では充分ではない。このセクションでは、小学校5年生の男女が学校でどのように扱われているかを分析する。ここで使われた指標は留年経験の割合と教材や文房具の供給である。

(a) 留年経験の割合

生徒が留年をする場合、この生徒は次の学校年度、同学年の生徒と共に進級せず、もう一度前年度と同じ学年を繰り返す。留年の決定は生徒自身、彼らの親、または彼らの先生や学校によって決められることがある(Brophy 2007)。

留年の生徒に対する影響については、長年議論されている。典型的には、留年する生徒は同じ学年を繰り返すことによって、学力の水準が向上することが期待される。しかし、心理的には生徒の自信喪失などマイナスな影響もある(Eisemon 1997)。留年が重なるこ

とによってクラス内の生徒数が増えるなど、留年の学校経営に対する影響も忘れてはならない課題である。(Brophy 2007)。さらに教育計画の視点では、1年間の教育を得るのに複数年間の資料を使うということで、留年は教育費の無駄遣いと考慮されている。(IIEP 2006)。

UNESCO (2003) は学年ごとで留年率に幅があると指摘した。特に東アジアでは、初等教育の最初の年で留年率がもっとも高いと報告している。

ベトナムの調査では、小学校5年生の生徒に留年について二つの質問をした。一つ目は小学校で過去何回留年をしたことがあるか、二つ目は小学校5年生を留年したかどうかである。

表4に、少なくとも過去一回留年をしたことがある小学校5年生の生徒の割合が提示されている。すべての地域で、男子のほうが女子より多くの割合が少なくとも一回は留年をしたことがあると回答している。これは統計的に有意な格差であった。

これらの男女格差はEFA Global Monitoring Report (UNESCO 2003)での報告と一致していた。表5に示すように、小学校5年生レベルでもより多くの男子が留年していた。三つの地域で統計的に有意な格差がみられた。

留年の文脈では「恵まれない状態」の意味は明らかではない。Kulpoo (1998) の報告によると、モーリシャスでは成績のトップ25パーセントが留年をしていた。追加された学習時間はよりよい成績につながるという考えから、モーリシャスでは、親から教師に子供を留年させるよう要望があるのである。もしより長く教育に接したという意味で留年が学力向上に貢献するのならば、特に無償初等教育において、留年する者は実際恵まれない状態にあるのではなく恵まれた状態にあり、よい待遇を受けていることになる。

(b) 教材や文房具品の供給

ベトナムの調査では、生徒に本学年度どれほどの教材を持っているかを尋ねた。データ収集の年には親が29冊の教科書を購入することが決められていた。例外は貧困家庭で、政府が主な教科書5冊を配給していた。親は

5年生のための文房具用品の10品(提出用ノート、自習用ノート、鉛筆、色鉛筆、計算機、ボールペン、小さい机、白墨、かばん、ものさし)を購入することになっていた(World Bank 2004)。これらは親の資産レベルをあらわす指標とも考えられるが、生徒のカリ

表4 2001年ベトナム小学校5年生男女が少なくとも一回留年した割合(P)と標本誤差(SE)

地域	少なくとも1回は留年した割合						
	男子		女子		男女格差		
	P_B	SE_B	P_G	SE_G	$P_G - P_B$	$SE_{P_G - P_B}$	
紅河三角地帯	7.8	0.45	4.4	0.30	-3.3	0.54	**
北東部	22.5	0.63	16.2	0.65	-6.3	0.90	**
北西部	36.3	1.96	26.9	2.07	-9.4	2.85	**
北中部	16.5	1.02	12.9	0.94	-3.5	1.38	**
中央海岸	15.9	0.85	11.4	0.75	-4.5	1.13	**
中央高原	29.8	1.52	23.2	1.72	-6.6	2.29	**
南東部	21.5	0.78	13.5	0.63	-8.0	1.00	**
メコン河三角地帯	25.8	0.82	18.5	0.64	-7.3	1.04	**
ベトナム	19.6	0.32	13.8	0.30	-5.9	0.44	**

(注) ** 男女格差は信頼度95%で有意。

(出所) Data Archive: Vietnam Grade 5 Mathematics and Reading assessment study (World Bank 2001) より筆者作成

表5 2001年ベトナム小学校5年生男女で5年生を留年した割合(P)と標本誤差(SE)

地域	小学校5年生を留年した割合						
	男子		女子		男女格差		
	P_B	SE_B	P_G	SE_G	$P_G - P_B$	$SE_{P_G - P_B}$	
紅河三角地帯	1.9	0.19	1.2	0.17	-0.7	0.26	**
北東部	3.0	0.26	2.3	0.24	-0.7	0.35	**
北西部	4.6	0.72	4.2	0.89	-0.4	1.14	
北中部	3.8	0.55	2.8	0.47	-1.0	0.72	
中央海岸	3.0	0.38	2.5	0.41	-0.5	0.56	
中央高原	5.9	0.73	5.5	0.92	-0.4	1.18	
南東部	2.9	0.38	1.8	0.23	-1.1	0.44	**
メコン河三角地帯	3.3	0.29	2.7	0.23	-0.6	0.37	
ベトナム	3.2	0.13	2.4	0.13	-0.8	0.18	**

(注) ** 男女格差は信頼度95%で有意。

(出所) Data Archive: Vietnam Grade 5 Mathematics and Reading assessment study (World Bank 2001) より筆者作成

キュラムにおける機会(つまり学校でのプロセス)を記すものでもある。

表6には、ベトナムの小学校5年生の男子と女子が持っている教科書の冊数(合計29冊)が地域ごとに示されている。男女格差は少ないが、中央海岸と南東部での格差は、統

計的に有意に、男子の方が教科書の数が多かった。

文房具品においては、すべての地域で男子より女子のほうが多くの品数を持っていた。北西部と中央海岸以外では、これらの格差は統計的に有意となった(表7)。これは、この

表6 2001年ベトナム小学校5年生が所持する教科書数の平均値(M)と標本誤差(SE)

地域	所持する教科書数(最高29冊)						
	男子		女子		男女格差		
	M_B	SE_B	M_G	SE_G	$M_G - M_B$	$SE_{M_G - M_B}$	
紅河三角地帯	18.4	0.16	18.4	0.14	0.0	0.21	
北東部	15.5	0.15	15.5	0.15	0.0	0.21	
北西部	12.9	0.29	13.0	0.33	0.0	0.44	
北中部	14.5	0.19	14.3	0.21	-0.2	0.28	
中央海岸	15.4	0.14	15.0	0.15	-0.4	0.20	**
中央高原	15.3	0.25	15.0	0.26	-0.3	0.36	
南東部	16.7	0.14	16.3	0.13	-0.4	0.19	**
メコン河三角地帯	15.5	0.12	15.3	0.11	-0.2	0.16	
ベトナム	16.0	0.06	15.8	0.06	-0.1	0.08	

(注) ** 男女格差は信頼度95%で有意。

(出所) Data Archive: Vietnam Grade 5 Mathematics and Reading assessment study (World Bank 2001)より筆者作成

表7 2001年ベトナム小学校5年生が所持する文房具品の平均値(M)と標本誤差(SE)

地域	所持する文房具品の数(最高10品目)						
	男子		女子		男女格差		
	M_B	SE_B	M_G	SE_G	$M_G - M_B$	$SE_{M_G - M_B}$	
紅河三角地帯	8.2	0.03	8.3	0.03	0.2	0.05	**
北東部	8.0	0.04	8.1	0.03	0.2	0.05	**
北西部	7.5	0.10	7.7	0.09	0.2	0.13	
北中部	7.8	0.06	8.0	0.06	0.2	0.09	**
中央海岸	8.5	0.06	8.6	0.06	0.1	0.08	
中央高原	7.6	0.10	7.9	0.10	0.3	0.14	**
南東部	8.5	0.04	8.6	0.03	0.2	0.05	**
メコン河三角地帯	8.2	0.04	8.3	0.03	0.1	0.05	**
ベトナム	8.1	0.02	8.3	0.02	0.2	0.02	**

(注) ** 男女格差は信頼度95%で有意。

(出所) Data Archive: Vietnam Grade 5 Mathematics and Reading assessment study (World Bank 2001)より筆者作成

指標が学習機会だけではなく親の資産的境遇も表すということに帰しているともいえるであろう。

(3) 家庭環境と学習への援助の男女格差

女子が教育で成功するための条件は、学校にだけあるとは限らない。家庭の境遇や家族の援助にも大切な意味がある。

学習のための家庭環境に関する指標は三つ検証された。社会経済的背景、通学時間、そして家の手伝いに費やす時間である。学習のための家族の援助に関しては、一般的な家族からの関心と塾や家庭教師を通じての学習時間の二つの指標が検証された。

(a) 社会経済的背景

一般的に、社会経済的に恵まれた生徒は、社会経済的に恵まれない生徒に比べて成績がよい。これは、裕福な家庭ほど、親は子供のために本を買って与えることができ、子供が静かに勉強できるように勉強部屋を用意することができ、宿題を手伝うことができ、子供の学校での学習に興味を持つからであると考

えられている。

ベトナムの調査では、社会経済的指標は家庭での所持品目、親の学歴、人種、家庭の会話に使われる言葉、家庭での本の数を主成分分析を用い作成された(Griffin 2004a)。この尺度は平均0、偏差値が1となるよう標準化された。

表8に示すように、すべての地域で、男女の社会経済背景の格差は標本誤差に比べると小さいものであった。つまり、男女とも同じような社会経済環境レベルに属するということである。

(b) 通学時間

女子の学校参加や成績に影響するものとして、学校への距離、家事手伝いに費やす時間、学校での暴力やいじめに対する恐怖、女子トイレの有無などが考えられる(UNESCO 2003; ADB 2006; Oxaal 1997)。

UNESCO (2003) は、家から学校への距離は学校参加に影響がある理由として、親は男子に比べて女子のほうが危険にさらされるリスクが大きいので、自分の娘を学校に通わず

表8 ベトナム小学校5年生男女の家庭環境指標の平均値(M)と標本誤差(SE)

地域	家庭環境指標					
	男子		女子		男女格差	
	M_B	SE_B	M_G	SE_G	$M_G - M_B$	$SE_{M_G - M_B}$
紅河三角地帯	0.4	0.02	0.4	0.02	0.0	0.02
北東部	-0.4	0.03	-0.4	0.03	0.0	0.04
北西部	-1.7	0.09	-1.6	0.10	0.1	0.13
北中部	0.2	0.05	0.2	0.05	0.0	0.08
中央海岸	0.2	0.04	0.1	0.04	0.0	0.06
中央高原	-0.4	0.07	-0.3	0.09	0.0	0.11
南東部	0.2	0.03	0.2	0.03	-0.1	0.04
メコン河三角地帯	0.0	0.02	0.0	0.02	0.0	0.03
ベトナム	0.0	0.01	0.0	0.01	0.0	0.02

(注) ** 男女格差は信頼度95%で有意。

(出所) Data Archive: Vietnam Grade 5 Mathematics and Reading assessment study (World Bank 2001)より筆者作成

のを好まないと報告している。さらに、もし子供の通学時間が長いと、疲れの要因にもなり、また、宿題や予習をする時間が減少するとも考えられる。

表9では、通学時間の平均と標本誤差を示した。一般的に、ベトナムの子供たちは、通学時間にあまり時間をかけておらず、平均は男女とも、約17分であった。一番長くて北西部の21から22分であった。北東部を除いて、通学時間に男女格差はなかった。北東部では、女子の通勤時間は男子のそれより平均0.8分上回った。

(c) 家事手伝いに費やす時間

家庭での仕事が多いと、勉強の時間が減少する。結果として、これは成績に影響するであろう。女子は家庭での仕事や幼少児童の世話などで、欠席が多くなるという仮説も立てられる。

ベトナムの調査では、家庭で何時間仕事に費やすかを生徒に尋ねた。回答が一日につき何分かという単位に変換された。表10にも見られるように、ベトナムでは、子供は一日

1時間半から2時間ぐらい働く。

男女格差については、北西部以外のすべての地域で、統計的に有意な格差があり、女子のほうが男子より多くの時間を家事に費やした。実際、北西部では男子のほうが女子より家事に多くの時間を費やした。ただし、この格差は統計的に有意なものではなかった。

Cuc (2002) の報告によると、これらの地域では、女子は教育を受けるよりむしろ家庭で仕事を手伝うことを期待されていて、この仕事の種類は地域によってあらゆるものがある。三角地帯では、女子は穀物や魚を捕る作業があり、山岳地帯では、親が穀物を捕りにでかけるため、女子は家での作業をする。北西部で統計的に有意な格差がなかったのは、貧困が原因との仮説が立てられる。つまり貧困のため全員が食料や収入を得る必要があるため格差は少ないと考えられる。

(d) 家族の関心

一般的に、家族の中に子供の勉強に興味を持つ人がいると、その子供は家族からの関心がない子供より成績がよいといわれている。

表9 ベトナム小学校5年生の男女の通学時間の平均値 (M) と標本誤差(SE)

地域	通学時間 (分)						
	男子		女子		男女格差		
	M_B	SE_B	M_G	SE_G	$M_G - M_B$	$SE_{M_G - M_B}$	
紅河三角地帯	15.0	0.16	15.0	0.17	-0.1	0.23	
北東部	18.7	0.25	19.5	0.26	0.8	0.36	**
北西部	21.7	0.60	21.4	0.73	-0.3	0.95	
北中部	16.4	0.41	16.5	0.43	0.1	0.60	
中央海岸	14.7	0.26	15.0	0.31	0.4	0.40	
中央高原	18.0	0.74	18.3	0.68	0.3	1.00	
南東部	14.3	0.21	14.5	0.23	0.2	0.31	
メコン河三角地帯	19.0	0.25	19.1	0.26	0.1	0.36	
ベトナム	16.8	0.11	17.0	0.10	0.2	0.15	

(注) ** 男女格差は信頼度95%で有意。

(出所) Data Archive: Vietnam Grade 5 Mathematics and Reading assessment study (World Bank 2001) より筆者作成

家族の興味は子供の勉強に対する援助に関する三つの質問から主成分分析を用いて作成された。その質問は、家族の誰かが宿題がすんだことを確かめるかどうか、家族の誰かが宿題を手伝うかどうか、そして家族の誰かが学校で何を勉強しているかを子供に尋ねるかど

うかである。この尺度は平均0偏差値1となるよう標準化された (Griffin 2004a)。

表 11 に示すように、たいていの地域で、家族の持つ興味での男女格差はなかった。つまり、家族は男子にも女子にも同じように関心を示していた。

表 10 ベトナム小学校5年生の男女が家事に費やす時間の平均値 (M) と標本誤差(SE)

地域	家事に費やす時間 (分)						
	男子		女子		男女格差		
	M_B	SE_B	M_G	SE_G	$M_G - M_B$	$SE_{M_G - M_B}$	
紅河三角地帯	101.9	1.19	112.6	1.12	10.8	1.63	**
北東部	121.7	1.09	126.5	1.13	4.8	1.57	**
北西部	126.4	2.10	122.9	2.20	-3.5	3.04	
北中部	116.6	1.86	124.6	1.49	8.0	2.38	**
中央海岸	101.3	1.54	115.6	1.38	14.3	2.07	**
中央高原	109.7	2.68	118.3	2.31	8.6	3.53	**
南東部	90.0	1.25	104.4	1.41	14.4	1.88	**
メコン河三角地帯	99.4	1.00	107.0	1.00	7.6	1.41	**
ベトナム	106.0	0.53	115.1	0.49	9.1	0.72	**

(注) ** 男女格差は信頼度95%で有意。

(出所) Data Archive: Vietnam Grade 5 Mathematics and Reading assessment study (World Bank 2001) より筆者作成

表 11 ベトナム小学校5年生の男女の家族の興味平均値 (M) と標本誤差(SE)

地域	家族興味の指標					
	男子		女子		男女格差	
	M_B	SE_B	M_G	SE_G	$M_G - M_B$	$SE_{M_G - M_B}$
紅河三角地帯	0.1	0.03	0.1	0.03	0.0	0.04
北東部	0.1	0.03	0.1	0.02	0.0	0.03
北西部	-0.1	0.06	-0.1	0.05	0.0	0.08
北中部	0.1	0.04	0.2	0.03	0.1	0.05
中央海岸	-0.1	0.03	-0.1	0.04	0.0	0.05
中央高原	-0.1	0.05	-0.1	0.05	0.0	0.07
南東部	-0.1	0.02	-0.1	0.02	0.0	0.03
メコン河三角地帯	-0.1	0.03	-0.1	0.02	0.0	0.03
ベトナム	0.0	0.01	0.0	0.01	0.0	0.01

(注) ** 男女格差は信頼度95%で有意。

(出所) Data Archive: Vietnam Grade 5 Mathematics and Reading assessment study (World Bank 2001) より筆者作成

(e) 塾や家庭教師の時間

もうひとつの家庭の援助を表す情報として、塾に通ったり家庭教師をつけたりする学校外学習がある。ベトナムの調査では、この学校外の学習について数々の質問をした。どの科目を勉強しているか、何時間勉強してい

るか、有料かどうか、誰から教わっているかなどである。表12は、小学校5年生の男子と女子の塾や家庭教師を経験している生徒の割合と標本誤差である。ベトナム全体としては、3分の1以上の男子と女子が塾や家庭教師を経験していた。南東部での割合が高く、

表12 ベトナム小学校5年生の男女の塾や家庭教師の経験がある割合 (P) と標本誤差

地域	塾や家庭教師経験の割合					
	男子		女子		男女格差	
	P_B	SE_B	P_G	SE_G	$P_G - P_B$	$SE_{P_G - P_B}$
紅河三角地帯	26.7	1.61	26.4	1.67	-0.3	2.32
北東部	30.4	1.65	31.5	1.65	1.1	2.34
北西部	23.2	2.77	24.8	2.97	1.6	4.05
北中部	42.1	2.69	43.0	2.70	1.0	3.81
中央海岸	51.8	2.31	51.3	2.58	-0.5	3.46
中央高原	48.9	3.35	49.6	3.70	0.7	4.99
南東部	54.3	2.03	55.8	2.23	1.5	3.01
メコン河三角地帯	33.1	1.21	33.6	1.26	0.5	1.74
ベトナム	38.2	0.66	38.7	0.69	0.6	0.96

(注) ** 男女格差は信頼度95%で有意。

(出所) Data Archive: Vietnam Grade 5 Mathematics and Reading assessment study (World Bank 2001) より筆者作成

表13 ベトナム小学校5年生の男女が塾や家庭教師に費やした時間の平均値 (M) と標本

地域	塾や家庭教師との時間					
	男子		女子		男女格差	
	M_B	SE_B	M_G	SE_G	$M_G - M_B$	$SE_{M_G - M_B}$
紅河三角地帯	5.7	0.20	5.6	0.19	-0.1	0.27
北東部	5.7	0.15	5.9	0.16	0.1	0.22
北西部	5.1	0.48	4.9	0.40	-0.2	0.63
北中部	6.1	0.25	6.0	0.24	-0.2	0.34
中央海岸	6.4	0.18	6.2	0.20	-0.2	0.27
中央高原	7.1	0.37	7.4	0.29	0.3	0.47
南東部	7.0	0.17	7.0	0.19	0.0	0.25
メコン河三角地帯	6.0	0.19	6.0	0.19	0.0	0.27
ベトナム	6.3	0.07	6.2	0.08	0.0	0.11

(注) ** 男女格差は信頼度95%で有意。

(出所) Data Archive: Vietnam Grade 5 Mathematics and Reading assessment study (World Bank 2001) より筆者作成

(約54-55 パーセント)、それに続き中央海岸(51-52 パーセント)であった。しかし、男女格差はすべての地域でごく小さいものであった。家族の興味と同様、家庭の援助も男子も女子も同じように受けていた。

これらの結果は小学校5年生の男子と女子が関わっている塾や家庭教師の時間数とも一致している(表 13 参照)。

(4) 学習到達度の男女格差

(a) 読解力テストの成績

数々の研究において、読解力は女子のほうが優れているという結論を出している。2001年に行われたIEAの国際読解力推移調査(PIRLS)によると、37カ国で小学校4年生の女子は男子より読解力が優れていた(Mullis et al. 2003)。Lietz (2006) もPIRLSやOECDの国際学力調査(PISA)を含む140の調査を検証し、どのレベルでも女子優勢というのは一貫していると結論をだした。

表14にみられるように、すべての地域で女子は読解力が男子より高かった。これらの格差は紅河三角地帯、北東部、南東部、メコ

ン河三角地帯、ベトナム全体で統計的有意であった。さらに分析すると、読解力のすべての分野(物語的文章の読解、解説書的文章の読解、記録書的文章の読解)で女子は男子の成績を上回った。ベトナムの結果は齋藤・黒田(2000)の結果とは異なった。アフリカ南部諸国で女子は記録書的文章の側面では男子に及ばなかったが、他の二つの側面(物語的文章の読解と解説書的文章)では女子も男子も同等の成績であった(齋藤・黒田 2000)。

(b) 算数のテストの成績

一般的に、男子は算数を含む理科系の科目で女子より優秀であるといわれている。SACMEQの14カ国のなかでは、五つの国で男子が女子の成績を上回った(Saito 2004a; Saito 2004b)。2003年のTIMSSでは、46カ国中9カ国で、8年生(日本の中学校2年生)の女子は男子より統計的に有意に成績がよく、11カ国で、その逆であった。小学校4年生においては、4カ国で女子優勢で、7カ国で男子優勢であった(Mullis et al. 2005)。

表15は、算数のテストの平均点と標準誤

表 14 ベトナム小学校5年生の読解力テストの成績における男女格差

地域	読解力テストの得点						
	男子		女子		男女格差		
	M_B	SE_B	M_G	SE_G	$M_G - M_B$	$SE_{M_G - M_B}$	
紅河三角地帯	521.6	3.73	538.0	3.32	16.4	4.99	**
北東部	498.6	2.85	508.0	3.31	9.5	4.36	**
北西部	473.8	6.59	484.6	6.64	10.8	9.36	
北中部	502.3	4.92	513.3	4.73	11.0	6.82	
中央海岸	488.1	3.92	495.5	3.88	7.4	5.52	
中央高原	499.6	7.75	502.4	7.54	2.7	10.82	
南東部	500.2	3.17	513.9	3.67	13.7	4.85	**
メコン河三角地帯	461.4	2.65	471.2	2.48	9.8	3.63	**
ベトナム	494.5	1.47	505.9	1.28	11.4	1.95	**

(注) ** 男女格差は信頼度95%で有意。

(出所) Data Archive: Vietnam Grade 5 Mathematics and Reading assessment study (World Bank 2001)より筆者作成

表 15 ベトナム小学校5年生の算数のテストの成績における男女格差

地域	算数のテストの得点					
	男子		女子		男女格差	
	M_B	SE_B	M_G	SE_G	$M_G - M_B$	$SE_{M_G - M_B}$
紅河三角地帯	530.4	4.05	529.9	4.32	-0.4	5.93
北東部	509.1	3.38	508.0	3.95	-1.1	5.20
北西部	486.0	8.20	489.0	8.52	3.0	11.82
北中部	518.0	5.20	518.0	5.05	0.0	7.25
中央海岸	496.5	3.69	493.7	3.81	-2.8	5.30
中央高原	511.2	6.51	506.0	7.92	-5.2	10.25
南東部	497.8	3.47	491.4	3.82	-6.4	5.16
メコン河三角地帯	459.5	2.31	455.5	2.41	-4.0	3.34
ベトナム	501.1	1.49	498.8	1.31	-2.2	1.98

(注) ** 男女格差は信頼度95%で有意。

(出所) Data Archive: Vietnam Grade 5 Mathematics and Reading assessment study (World Bank 2001) より筆者作成

差である。読解力では女子が優勢であったのに比べ、算数では結果はさまざまであった。しかし、これらの男女格差は統計的に有意なものではなかった。より詳しい分析によると、四つの地域で女子は「数」の側面において男子より成績がよかったが、他の二つの側面(測定とグラフ・データ)では、すべての地域で女子は男子の成績に及ばなかった。

4. 結論

本小論の目的は、ベトナムでの男女平等性を調査することであった。EFAのゴール達成という文脈のなかでの男女平等性を調べるために、学校参加、学校でのプロセス、家庭環境、学習達成度の四つの面での指標を通して評価した。総括的に、小学校5年生の生徒数は、男子より女子の人数のほうが少なかった。その反面、女子は欠席日数が少なかった。さらに、女子は男子より年齢が若かった。学校では、女子も男子も同等のカリキュラムの機会が与えられているが、男子のほうが留年の数が多かった。女子は文房具所持品が男子

より多かったが、社会経済環境は男子と同じであった。家庭では、親は、男子にも女子にも同等の関心を示し、塾や家庭教師を経験させた。しかし、女子はさらに家事手伝いに男子より多くの時間を費やした。最後に、学習達成度の面では、読解力は女子は男子より圧倒的によく、算数では男女同等の成績であった。

これらの結果から、女子はいったん小学校に入学すると、家庭でのいかなる重労働があるにもかかわらず、男子より短い年月で学校を卒業し、成績は男子より優れているか、もしくは同等であるといえる。このような恵まれない男子に対して政府、学校、家庭で何をすべきかを考えることが重要な課題であるともいえる。

Saito (1998a, 1998b) や齋藤・黒田 (2000) が出した結論とは異なり、ベトナムでは、「より選ばれた女子」が学校に参加しているということが、読解力における女子の成績の良さと、算数での男女格差が存在しないことを説明できるともいえる。もし男子と同じレベルまで女子の就学率が増えたと、

「選ばれない女子」までも含めることになり、同じ結果は得られない可能性もある。男女平等にEFAが達成された後に教育の質においての男女格差が拡大しないような戦略を考慮する必要があるといえるであろう。

ベトナムの調査では小学校高学年に焦点がおかれたため、小学校後の教育や人生一般の機会については何も答えが出されていない。中等教育や高等教育へのアクセスについては、ベトナムは初等教育と同様女子の男女合計に対する割合は常に47パーセントを保っている (Le 2006)。これは、女子が小学校レベルで顕した男子と同様または男子より優れた才能が小学校以降でも引き継がれているということである。これはベトナムの教育省が女子の潜在的能力を身長させる方向の政策をとっているという意味でもある。初等教育以降での教育の質に関するデータが不十分であるベトナムの教育省にとって、中等教育や高等教育のレベルでの教育の質の調査をもとに、男女格差を定期的にモニターすることも、EFAのゴールを達成するための重要課題であるといえるであろう。

参考文献

- 齋藤みを子・黒田一雄 (2000) 「アフリカ7カ国における初等教育就学児童の読解力の男女間格差に関する統計的考察 教育の質調査のための南アフリカ諸国連合(SACMEQ)の調査結果から」『国際教育協力論集』3巻1号, 25-39頁. Asian Development Bank (2006). *Pursuing gender equality through the millennium development goals in Asia and the Pacific*. Manila: Asian Development Bank.
- Brophy, J. (2007). *Grade repetition*. Education policy series 6. Paris: UNESCO-IIEP.
- Cuc, N. (2002). *Family and students' influences on early withdrawal from lower secondary schools in rural Vietnam*. Unpublished doctoral dissertation. Melbourne: University of Melbourne.
- Eisemon, T. O. (1997). *Reducing repetition: Issues and strategies*. Fundamentals of Educational Planning, No. 55. Paris: UNESCO-IIEP.
- Griffin, P. (2004a). *Chapter 2: What were the levels of achievement of grade 5 pupils in Reading and Mathematics: Volume 2*. Hanoi: World Bank.
- Griffin, P. (2004b). *Chapter 2: Pupil test development and calibration*. In *Vietnam Reading and Mathematics assessment study: Volume 3*. Hanoi: World Bank.
- Mullis, I. V. S., Martin, M. O. & Foy, P. (2005). *IEA's TIMSS 2003 International Report on Achievement in the Mathematics Cognitive Domains: Findings from a Developmental Project*. Boston: International Association for the Evaluation of Educational Achievement (IEA).
- Mullis, I. V. S., Martin, M. O., Gonzales, E. J. & Kennedy, A. K. (2003). *PIRLS 2001 International report: IEA's Study of Reading Literacy Achievement in Primary School in 35 Countries*. Boston: International Association for the Evaluation of Educational Achievement (IEA).
- IIEP (2006). *Module 2: Internal efficiency of an education system*. Self-learning materials on basic quantitative techniques used in educational planning. Paris: UNESCO-IIEP.
- Kulpoo, D. (1998). *The quality of education: Some policy suggestions based on a survey of schools*. SACMEQ policy research: Report No. 1. Paris: UNESCO-IIEP.
- Le, C. L. V. (2006). *Reform or renovations? The political economy of education reform in Vietnam since the introduction of Xã Hội Nghĩa*. Nagoya: Nagoya University.
- Lietz, P. (2006). A meta-analysis of gender differences in reading achievement at the secondary school level. *Studies in educational evaluation*, 32(4), pp. 317-344.
- Oxaal, Z. (1997). Education and poverty: A gender analysis. BRIDGE Report 53. Brighton: BRIDGE.
- Ross, K. & Leite, S. (2000). *IIEP Jack User's Guide*. Paris: UNESCO-IIEP.
- Ross, K., Saito, M., Dolata, S. & Ikeda, M. (2004). *Chapter 4: Sample design procedures: The Vietnam grade 5 survey*. In *Vietnam Reading and*

- Mathematics assessment study: Volume 3*. Hanoi: World Bank.
- Saito, M. (1998a). Gender vs. socio-economic status and school location differences in Grade 6 Reading Literacy in five African countries. *Studies in educational evaluation*, 24(3), pp. 249-261.
- Saito, M. (1998b). The impact of gender, social background, and school location on reading levels in Southern Africa. *IIEP newsletter*, 16(4). Paris: UNESCO/IIEP.
- Saito, M. (2004a). Gender Equality and Education for All: Message from SACMEQ Countries. A paper presented at the SACMEQ Data Archive Dissemination Workshop (Nairobi, Kenya & Pretoria, South Africa, 28 June – 2 July 2004).
- Saito, M. (2004b). Gender equality in reading and mathematics achievement: Reflecting on EFA goal 5. *IIEP Newsletter*, 22(2). Paris: UNESCO/IIEP.
- Tran, T. Q. & To, X. P. (2002). Vietnam: Social development is a priority. Social watch report 2002: The social impact of globalization in the world. Montevideo: The Third World Institute. Downloaded from <http://unpan1.un.org/intradoc/groups/public/documents/APCITY/UNPAN007058.pdf>
- UNESCO (2000). *The Dakar framework for action*. ED-2000/WS/27. Paris: UNESCO.
- UNESCO (2003). *EFA Global Monitoring Report 2003/2004: Gender and education for all: the leap to equality*. Paris: UNESCO.
- United Nations (2006). *The millennium development goals report 2006*. New York: United Nations.
- World Bank (2001). *Data Archive: Vietnam Grade 5 Mathematics and Reading assessment study*. Hanoi: The World Bank.
- World Bank (2004). *Vietnam reading and mathematics assessment study*. Volume 2. Hanoi: The World Bank.
- World Bank Independent Evaluation Group (2006). *From schooling access to learning outcomes: An unfinished agenda*. An evaluation of World Bank support to primary education. Washington, D.C.: The World Bank.